

一 評論

【解答例】

- (一) (1) 便宜的 (2) 交渉 (3) 潰(される) (4) 突破 (5) 付随物
- (二) 媒介物である貨幣が商品化し、その価格変動が強制的に社会に影響すること。(35字)
- (三) 本来販売目的でなかったはずの自然を市場経済が商品化したこと。(30字)
- (四) 「労働一般」から「労働力」を理論的に区別しても、現実的に労働力を商品として労働から独立して機能させることは不可能だから。(60字)
- (五) 存在と機能が全く分離され、販売目的でなかったものにも市場で商品価値が与えられた結果、売買の対象や性格が絶え間なく変転し続け、誰にも予測不能である状況。(75字)

【解説】

- (一) 難しくはないので完答が望ましい。
- (二) 四行目から九行目にかけての記述を中心に、第一段落の内容をまとめる。貨幣は「物の売買を成り立たせるための媒介手段」であり「売買するために造られたものではない」にもかかわらず、市場経済の発展の中で貨幣そのものが「商品化され、売買の目的物にされてしまう」。このような現象の「制縛力」については、貨幣の売買価格の変動が「経済全体への実質的な強制的な影響力(権力)をもつ」という八、九行目の記述が対応している。字数制限が厳しいため、「媒介物」「商品化」「価格変動」「影響力」などのキーワードを的確に抜き出し簡潔にまとめる力が必要。
- (三) 第二段落冒頭で「土地」について「元来販売目的のために造られたのではなく、(中略)「自然」の中心的一部なのである」とあることから、「土地」のような「自然」はもともと「販売目的」のものではないことが読み取れる。また、傍線部前行の「市場経済」が支配してしまうと自然もまた商品化される」という記述にも注目。「自然」は最初から商品としてあるのではなく、「市場経済」の原理によって売買される対象となるのである。解答の方向性は見当をつけやすいが、三十字以内という字数が厳しい。
- (四) 非難の対象となるのは傍線部直前の「その範疇創出」にあたる。したがってまずマルクスが行った「範疇創出」の内容を第三段落に即して「労働一般」と「労働力」の範疇的な区別としてまとめる。さらに、それがなぜ「観念論的」という非難の対象となるのかを考えると、現実には「労働力」は独立して存在するものではなく理論的に区別したとしても実際の労働の場においては意味を持たないからである(第五段落)。このような理論と現実との矛盾を対比的にまとめる。
- (五) 最終段落を中心にまとめる。無数の消費物と無数の消費者が存在する今日の「市場経済」の中には、何が何と売買されるのか、といった売買の対象や性質ももはや無数であり、絶えず変転し続けていて予測が意味をなさない。この点を核に、販売目的ではなかったはずのものが商品化するという冒頭以降述べられていた現象がこうした変転に大きくかかわっていることに触れる。

二 小説

【解答例】

- (一) (1) あっさりと (2) 大切な部分とつまらない部分とを取り違えること
(3) 細かい一つ一つの動作
- (二) 子供は平等だと思うが、大して頑張らずに子を預ける親に違和感を抱いてしまうから。(39字)
- (三) 努力もせずに何もできないと思い、他者の努力の結果に焦りなく称賛する人の屈託なさ。(40字)
- (四) 端役であり、地味な存在であったはずの千夏が、努力の結果声や身体を通し舞台上で特別な存在感を放つ様子を観て圧倒されたこと。(60字)
- (五) 千夏の表現に触発され、才能や努力の有無により他人と自分を単純に比較することはやめ、自分らしさを表現する方法も模索しようとする前向きな気持ち。(70字)

【解説】

- (一) 辞書的な意味を答えればよいが、文脈に沿った日本語にすることも意識したい。
- (二) ひかりの言葉と、ひかりに共感している早希の言葉を道しるべとして解いていく。赤ちゃんを平等に可愛がることは職務であり同時に本心であるが、一方で自分よりも能力が低くただらと働く母親への不満をひかりは漏らしていた。預かる赤ちゃんは平等だが、その母親の扱いは意識の上では必ずしも平等にはできないという葛藤の意識をまとめればよい。
- (三) 対象は直接には、直前の「屈託のないほめ言葉」であろう。あとはほめ言葉を発した人々の特徴をまとめればよい。しかし本質的に考えれば、ほめ言葉にこめられた屈託のなさそのものが、「駄目なくせに」頑張らねばならず、そうでない人を見下しがちな早希のナイーブな心情に、そうした心情を意に介することなく触れたことを指摘する必要がある。
- (四) 直接のきっかけはもちろん千夏であるから、千夏のことを中心に記述すればよい。まず早希やひかりは同級生であった原千夏のことを、主役との比較やこれまでのつきあいからどこか低く見ており、早希に至ってはそもそもミュージカル公演自体にも乗り気でなかった様子が、本文中には散見できる。しかしその千夏が主役とは別のところで声や身体を通して特別な輝きを放ち、早希やひかりを圧倒することで考えを改めるという文脈である。この文脈を60字にまとめればよいが、収めるためには厳しい語彙選択が必要だろう。
- (五) まずそもそも「スライダー」とは何か。決め球であるとされるが、ミュージカル公演の舞台上で端役であり、早希が侮っていた千夏の見せた「スライダー」とは、千夏に備わる声(歌)や身体(お芝居)である。これまで二人は頑張るか頑張らないかという狭い価値観に囚われて苦しんでいたが、人間には誰も自分だけの特別な「決め球」があると実感し、それぞれ探していこうと感じた、という趣旨のことが書いてあればよい。

三 古文

【解答例】

- (一) (1) とても尋常な心地ではなく (2) 通り過ぎることができず
(3) どのように申し上げたのだろう
- (二) 恋人が長く訪れずもはや縁が絶えたかと思われる状況。(25字)
- (三) 嵐が紅葉の葉を散らして欲しいと思わないのと同様に、あなたとお会いするという約束の言葉を散らして台無しにして欲しいなどと私は思っていないのに。
- (四) 男の訪問の滞りを詫げる風雅な文面と筆跡に心惹かれながらも、それを見たことで心がかえって乱され会えない悲しさが募っている。(60字)
- (五) 夢見心地であなたと起き別れた時に流した悲しみの涙が、いっそう恨みがましくて

【解説】

- (一) (1) 男性との関係に辛い思いをしているなかで太秦詣でを思いついたのであるから、「あやし」にはネガティブな意味が付与されていると考えてよい。
- (2) 「がてに」で「～しかねて」「～できなくて」の意。
- (3) 「聞こゆ」は「申し上げる」意の謙譲語として捉えておくのがよい。「けん」は、過去推量「けむ」の「む」が変化して「ん」になったもの。助動詞「けむ」は、連用形接続のため、ヤ行下二段「聞こゆ」の連用形「聞こえ」になっている。
- (二) 傍線部「今はかくにこそ」の後ろには「あれ」（ラ行変格活用「有り」の已然形）が省略されており、係り結びにおける「結びの省略」が行われていることに注意。
- リード文で、思いを交わしていた恋人の貴族がいたことを把握しておれば、冒頭で「葦分け」（障害）があり、また傍線部の直前で「絶えてほど経るおぼつかなさ……」と述べられていることから、しばらく恋人の訪問がなく、寂しい思いをしていることが窺える。そこから、現状の二人が疎遠な状況であることを理解することができる。
- (三) 歌の直前では「木々の紅葉いろいろに見えて」や「折しも風さへ吹いて」と述べられ、太秦を彩る山々の紅葉が風に吹かれている自然の様子が描写されている。歌はこれを踏まえたもので、「木の葉」（紅葉）と「言の葉」とが掛詞となっており、嵐によって紅葉が散ってしまうことを望まないことと、恋人と交わした言葉が散ってしまう（台無しになってしまう）ことを望まないことと、その両者を重ね合わせている歌である。
- (四) 直訳すれば、「かえってかき乱される心の動揺」となる。傍線部直前では、男からの手紙の「墨つき」「筆の流れ」など、文面や筆跡に心惹かれていることを吐露している。それが「かえって」心を乱すのは、手紙をもらっても現状会えていないこと変わらないため、手紙をきっかけとして思いが募る一方であるからに他ならない。
- (五) 最後の段落は、夜、男が久々にやってきた場面である。「我にもあらず」とは、直訳すれば「うわの空」や「訳が分からない」という意味であるが、そのままの意味ではなく、筆者が男との逢瀬を夢のような出来事として捉えていることに注意したい。たとえば傍線部直後の「君や来し」というのは、『伊勢物語』69段に載せる「君や来しわれや行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てかきめてか」という歌のことである。筆者はこの『伊勢物語』の歌を、恋人に会えたのが夢かうつつ

か定かではない、という意味で用いていることは明らかであろう。そのため、単に「我にもあらず」を「うわの空」や「茫然自失」のような意味で捉えるのではなく、「夢かうつつか定かではない」「夢見心地」な状態という意味で捉えるのが適している。また、「袖の露」はよくある表現で、涙で袖を濡らしたこと、涙を流して悲しんでいるという表現であることは言を俟たない。傍線部最後の「かこちがましくて」の「かこち」は、「不平・愚痴を言う」という意味のタ行四段「かこつ」の連用形である。「がまし」とはシク活用の接尾語であり、現代語にも通ずる語である。直訳すれば「さも～のようだ」「～の傾向がある」の意味であるが、「恨みがましくて、」という表現が穏当であろう。

四 漢文

【解答例】

- (一) (1) たまたま (2) たとひ
- (二) (a) そとにあきなふものあり (b) いぬいづくにかきするや。
- (三) 船頭が、乗客が満杯となり追い風になったため、しきりに乗船するように催促した
- (四) 腹痛のため岸に降りて犬に銀を見張らせていたが、船頭に何度も催促されて慌てて自分だけ乗船してしまった。(50字)
- (五) 銀を監視しろという主人の言葉通り餓死するまで銀から離れず、死後までも銀を守るようにしていた犬の姿に深い忠義を感じたから。(60字)
- 〈別解〉銀を見張れという主人の命令を自身の死をも顧みず死後も守り続けた犬の話から、金銭よりも義臣の方が貴重な財産だと考えたから。(60字)

【解説】

- (一) 基本的な語の読みを問うている。確実に得点したい。
- (二) (a) 「于」は置き字。「商」は後文では「商人」という意味の名詞で用いられているが、ここでは「商う」という意味の動詞として見るべき。「有……者」の形になっているときには「……者有り」という形で訓読することも覚えておこう。(b) 前文で「銀はもう残っていないだろう」とあり、傍線部では犬が主語になっているが、「犬ももういないだろう」と解釈すると、続く「往きて尋ぬるに」とのつながりが悪いので、「犬はどこへ行ったのだろう」と疑問で解釈すべき。したがって「何」は「いづくに(か)」と訓読する。
- (三) 「舟子人の満ち風の順なるを以て、速りに舟に登らんことを催す」と訓読するか。「人も満員で風も追い風なので早く乗船してください」と船頭が商人に呼びかけている状況が読み取れればよい。
- (四) 50字でまとめるのが難しい。①「商」が腹痛のため一度船から降りたこと、②一緒に降りた犬に銀の見張りをさせたこと、③船頭が早くしろとせかしたため、慌てて自分だけ乗船してしまったこと、以上の三点を銀と犬を忘れた経緯としてまとめればよい。
- (五) 直前の「寧畜有義犬」をどう処理するかが問題。「義犬」に注目し、本文に登場する犬がどういう点で義犬と言えるのかを述べるのがオーソドックスなまとめ方。「銀を監視しろ」という主人からの命令に、飢え死にし、さらには死後も従い続けたことに触れ、その点に深い忠義があるという形で結ぶ。また、別解として、本文が新たに太守に着任した筆者への教訓めいた話になっていることを踏まえ、「寧」という比較の助字に着目する考え方も提示しておいた。この場合「義犬」との比較の対象を考えねばならないが、本文で「義犬」と価値の優劣がつけられるのは「銀」であり、それぞれを「義臣」「金銭」の例えとみなして金銭よりも義臣の方が貴重である、という形でまとめることも可能だと考えられる。